

# Be Ambitious.



# 志物



## 『遙かな尾瀬』 夏季学園にむけて③

今年の尾瀬は4月当初の降雪の影響で、実踏の頃にも雪が若干残っていました。尾瀬では5月下旬から6月上旬にかけてミズバショウが見ごろです。



### 【尾瀬と東京電力との出会い】

#### ◆尾瀬の歴史



## 尾瀬と東京電力

#### ◇明治時代から続く尾瀬の歴史

1890年(明治23年)、平野長蔵氏が尾瀬沼畔に行人小屋を建てたことをもって尾瀬開山と言われていますが、古くから尾瀬には、上州(群馬県)と会津(福島県)を結ぶ交易路が通っており、尾瀬沼のほとりには交易所が設けられていたそうです。地名のいわれには平家落人伝説と関係があるものもあり、深い歴史ロマンを感じさせます。



\*昔は、馬で尾瀬へ物資輸送を行っていた。

#### ◇穏やかなものとは決して言えない尾瀬の歴史

しかし尾瀬の歴史は決して穏やかなものではありませんでした。有数の豪雪地帯であり水が豊富であったこと、2000m級の山に囲まれたお椀のような地形をしていたことから、1903年(明治36年)には尾瀬における水力発電計画が発表されました。当時は国の富国強兵政策のため、電力の増産は国を挙げての課題だったのです。この計画に基づき大正時代の電力会社(利根発電)が尾瀬の土地を買収したことが、尾瀬と電力会社との出会いとなりました。しかし、当時から尾瀬の自然はまもるべきであるという声が政府内にも存在したこと、また度重なる戦争の影響等もあり、尾瀬は開発されることなく昭和の時代を迎えま



した。

\*約1600もの池塘が点在している。

## ◇尾瀬を訪れるハイカーが急増

昭和30年代後半ともなると、戦後の混乱はだいぶ収まり、人々の生活にも余裕が出てきました。そこで起こったハイキングブームと、名曲「夏の思い出」のヒットがあいまって、尾瀬を訪れるハイカーが急増したのです。今のように自然をまもる設備も人々のマナーも確立されていなかったため、尾瀬の自然は急速に荒廃してしまいました。



しかし、関係者の地道な努力により、尾瀬は美しいその姿を取り戻し、今日に至っています。



木道から外れて歩くハイカー



多くのハイカーでにぎわう尾瀬。  
湿原の上に座っている人もいた。

## 【尾瀬と東京電力の出会い】

明治から大正にかけての時代は、人々の暮らしに電気が入り始めた頃で、その需要は急速に高まっていました。そのため、当時発電の中心であった水力発電の建設をすすめることは、国を挙げての大きな課題でした。



昔の東電小屋

そこで、尾瀬の豊富な水を発電に生かそうと、1916年（大正5年）、当時の電力会社（利根発電）が尾瀬の群馬県側の土地（群馬県側だけは当時から私有地となっていた。福島・新潟県側は当時も今も国有林）を取得、1922年（大正11年）には関東水電が水利権（河川や湖沼の水を利用する権利）を取得しました。



### 東電小屋

尾瀬ヶ原を一望できる場所に位置することから、ハイカーに人気のある東電小屋。もともとは、昭和の初めに関東水電という当時の電力会社が、降水量調査のために建てたもので、当時は「水電小屋」と呼ばれていました。その後、東京電力の前身である東京電燈に引き継がれ、この時から「東電小屋」と呼ばれるようになったのです。